

あけのほし 2013年12月

「自由からの逃走」

菊田行住

「民は主の耳に達するほど、激しく不満を言った。・・・民に加わっていた雑多な他国人は飢えと渇きを訴え、イスラエルの人々も再び泣き言を言った。「誰か肉を食べさせてくれないものか。エジプトでは魚をただで食べていたし、きゅうりやメロン、葱や玉葱やにんにくが忘れられない。今では、わたしたちの唾は干上がり、どこを見回してもマナばかりで、何もない。・・・エジプトに引き返した方がましだ。」そして、互いに言い合った。「さあ一人の頭を立てて、エジプトへ帰ろう。」

(民数記11章1、4～6節、14章4節)

特定秘密保護法案が、衆参両議会で可決されました。このことが私たちにどのような意味を持っているのでしょうか。

言論の白山や、人権感覚に鋭い文化人、学者、弁護士等の団体は、この法案が成立することに激しく抗議いたしました。それは、この法案が出てくる時代の背景の本質を、鋭く洞察していたからなのだと思います。この法案の細かい部分の是非はともかく、国民が、官僚や政府がしていることを知ることが出来なくなる道に踏み出してしまったことだけは、確かなことだと思います。

この法案の成立に抗議をした一人に、映画監督の高畑勲さんがいます。その抗議のコメントとして、「このような自分たちの自由を奪いかねない法案を通してしまう今の政権を、国民が選んだということに愕然としている。」といった内容のものがありません。私自身も聖書から人間のあり方を学ぶ一人として、いつの時代も同じような危機に直面するのだという思いです。

冒頭の聖書箇所は、イスラエルの民が、エジプトでの奴隷生活から脱出し、神が約束した地に向かっている途中の出来事です。ここでは、約束の地に行くためには困難を伴う荒れ野を通らなくてはならなかったのですが、少ない食料と不安定な生活が続いたため、人々は不平や不満をもらしていました。こんなことなら、エジプトに戻って、奴隷でも良いから、美味しい肉牛野菜をたらふく食べたいと願ったのでした。しかし、イスラエルの人々は、何も強制的にこの荒れ野に連れてこられたわけではありません。奴隷として人間の尊厳を失ったまま生きたくはない、自由になりたいと心から求めて、エジプトからの脱出を決断したのです。しかし、その当初の思いは長い荒れ野での生活でなえてしまい、今まさに、自由と引き替えに、再び人の奴隷として服従して生きる道を選択しようとしています。

私たち人間は、このイスラエルの人々のように、自由を追い求める心と同時に、自由から逃走してしまう心をも、持っているのだと言えるでしょう。そしてこのことを詳しく取り扱っているのが、イスラエル出身のエーリッヒ・フロムという人です。フロムは、民主

主義国家のドイツから、なぜ、選挙によってナチス政権が誕生させられたのかの社会心理を研究し、そのことを『自由からの逃走』という本にまとめました。フロムはそこで、人というのは、自由を心から求め、自らの責任で全てのことを決断することに人間としての積極的な生を享受したいという方向性も持っている一方、その個人で責任を取る孤独に耐えかねて、自由という重荷から逃れて、力強い他者に依存と従属を求めてしまうといった方向の二つを持っているのだと言います。戦前のドイツがまさに経済的に大きな危機にあり、人々は皆、自由を捨ててまでも、強力な他者に依存してしまい、全体主義の中に自らの「個」を埋没させてしまったのだということです。

聖書の中に、イエスの弟子であったペトロとヨハネという人物が出てきます。彼らはイエスの生前は、決して有能であるとは言い難く、決して勇気あふれる英雄タイプの人物ではありませんでした。しかし、イエスの死という痛恨の出来事を経由して、彼らは変わって行きます。イエスの死は、言ってみれば、神以外の何者かが、人を従属させて奴隷のように扱うことに、抗議をした事への報復という側面がありました。イエスは、人が持つ自由といのちの尊厳を何よりも大切に、そしてそのことを、人がお互いに犯さないようにする事こそが、神の意志なのだ伝えていたのです。ペトロたちは、そのイエスの教えを、一旦は挫折をしながらも、再び立ち上がり、そのいのちのすべてを使って人々に、それが神の意志なのだ伝えて行ったのでした。この二人は、その中で、命を奪うぞと言って脅してくる当時の権力者に対して、このように言いました。「神に従わないであなた方に従うことが、神の前に正しいかどうか、考えて下さい。わたしたちは、(自分の目で) 見たことや (自分の耳で) 聞いたことを話さないではられないのです。」

私たちは、やはりもろい面を持っていて、すぐに大勢に流されて、強い意見を持っている人に依存してしまいやすい部分を抱えているのだと思います。特に、自分の身分を保障してくれたり、利益を与えてくれる人に対しては、自らの自由と尊厳を売り渡してしまう傾向か、どうしてもあるでしょうし、私自身も、やはりあると思います。しかし、それと同時に、私たちの中には、やはり、自由を求めて、命の尊厳を守るために、力づくで言うことを聞かせようとする人々に対して、抗議する思いも、ちゃんとあるのです。

特に私たちの社会には、未来を担って行く次の世代が待っています。彼らに今の世代の私たちが、何を残して行くことが出来るのでしょうか。経済的な安定でしょうか。そのことも、もちろん大切なことです。しかし、もっと大切なことは、私たちが、命のある限り、自分の目で見て、自分の耳で聞いたことを発言し自分の頭で考えた意見を、恐れなく発することが出来る自由を、残すことではないでしょうか。

このことを、御子イエス・キリストの御降誕を祝うクリスマスの時に、共に考えて行きたいと、心から願います。